■展望・解説■

中国で見た「日本と中国」

"JAPAN & CHINA" Observed in China

中　江　要　介*
Yosuke Nakae

1．はじめに

皆さんからご覧になると別世界みたいなところに生きてる人間は，世の中をどう見てるんだというのも，多少ご参考になるかと思ってお引き受けしたんです．

日本と中国との大げさに言えば文化の違いというか，国民性の違いというか，そういうところに焦点をあてて頂きたいなんて言われたんですが，私は別に比較文化の専門家でもありませんから，私が40年間外交官として世界方々で，最後は中国で仕事をさせて頂いた時の体験から，こんなことがありましたよというような話で，ご理解頂けますかと言いましたら，何でもよろしいと言われまして，それで演題は，「中国で見た〝日本と中国〟」，とこうしたんです．と言いますのは，「日本で見た中国」というのは，いやと言う程たくさん本もあれば論文もあればジャーナリストの論評もあれば，もう無茶苦茶にあるんです．ところが，私が在勤中も，日本に帰って来てからも苦々しく思っていることは，日本で見ている中国を一生懸命分析してみても，そんなものは実態の中国にはそのまま適応できないような妙な話なのにそれがまかり通っていることです．てっとり早い話で言えば，日本では鄧小平が亡くなられたらどうなるかと，毎日のように方々でいろんな人が勝手なことを言っているんです．皆さんが今もし中国へ行ってごらんになると鄧小平が死んだらどうなるか心配だなんて言ってる人は1人もいないんです．

「ポスト鄧小平」なんていう言葉は日本とアメリカかヨーロッパぐらいで流行しているだけなんです．本家本元の中国では，ポスト鄧小平の時代に入っているのに日本ではまだポスト鄧小平はどうなるかなんて，それでまたいろんな本を書いてお金をもうけている人がいるんです．そういうのが苦々しいので「中国で見た〝日本と中国〟」つまり日本がらみの中国との関係を中国でどう見ていたかということから話をしようかと思うんです．

1．着任したときの中国と日本（1984年）
——3,000人の日本青年の訪中と「涙」

着任した時の中国と日本はどうであったか，1984年というのはどんな年かというと，中華人民共和国建国35年なんです．この1984年の建国祝賀会というのは開闢以来一番盛んだったんです．天安門広場に新鋭兵器ミサイルをはじめものすごい軍事パレードをやりまして，中国は意気盛んだったんです．その1年程前に党の胡耀邦総書記が日本に来て，中曽根総理と会って，建国35年にあたって若い世代に中国を知ってもらうために，日本から3万人の青年を呼びたいと，こう言ったんです．で，皆びっくりしたんです．中国側の随行した連中がもっとびっくりしたんです．

「総書記，それは無理です」とこう言ったのかどうかは知りませんけれども「あそうか，多すぎるのか，それじゃ3,000人にしよう」と言ったんです．しかしそれでも300人の間違いじゃないかと思った人もいたくらいなんです．

それから1年後に実際3,000人の日本の青年が行くんです．中国全土にそれぞれ到着するんですが，一拠に3,000人が到着すると，これは大変ですから，各県からグループを作って，ある組は広州，ある組は上海，ある組は天津，ある組は西安，というように方々から入って，そして10月1日の国慶節の日には，その方々から入った3,000人が整然と全員天安門広場に集まるんです．それで，中国の若者と大交歓会．さぞ大変だろうとお思いでしょうが，天安門広場に3,000人というのはどこに消えてしまったかというくらいの数なんです．だから3万人といったのは理由があったのだと

* 三菱重工業㈱社長室顧問・元駐中国大使
〒100 東京都千代田区丸の内2-5-1
（註）平成7年4月19日第16回定時総会にて特別講演

思うんですが，夜になると花火です．これがまたものすごい花火．とにかく天安門広場の周りをものすごい音と火の柱を上げて，その迫力はやっぱり，あーこの国と戦争したら負けるなぁという感じでした．

副題に3,000人の日本青年の訪中と「涙」と書いてあります．「涙」なんていうのはおよそこのエネルギー・資源学会で出たことのない言葉だと思うんです．この「涙」というのは，その青年たちがいよいよ日本に帰る時に一緒につきあってくれた中国の仲間と別れを惜しむ訳ですが北京空港でも上海空港でも，あるいは天津の港でもそういう情景が日本のテレビでも一部上映されたのでご記憶の方もおありかと思います．その時によくご覧になると泣いているのは大体日本人なんです．中国の連中は，もらい泣きみたいな，悲しんでいるような顔はしてますけど，日本の青年たちは，男女とも涙を流して，握手をして帰っていくんです．その時にあるヨーロッパの外交官が私に言ったんです．あんなにすごい戦争をして日本にしこたまやられた中国の人達が国交正常化後，わずか十数年で，がらっと変わってあんなに抱き合って涙を流すような友好関係が持てるというのはわからない．自分としてはこれが本物かどうか興味を持ってみてるんだ．こう言ったのです．私はその言葉が，非常に印象に残ったんです．私もそうだろうと思ったんです．ところが，この「涙」が翌年になるとカラッと乾いて，そしてもう最近になってごらんなさい．当時，中国に行って涙を流した青年達が，今中国のために，日本と中国の友好のために，どこかで弁じたり，投書したり，意見を出したりしているのにお目にかかられたことはおありですか．無いんですよ．つまり，熱しやすくさめやすいというか，忘れっぽいというか，そこに日本人と中国人の違いというのが非常によくわかるように思うんです．これがこの「涙」の話です．

2．奇妙な日中関係

次は，奇妙な日中関係．

私が着任した時みんなに言われたんです．日中関係がこんなにいい時に着任する大使は幸せだと．

ところが，その翌年になると途端にいろいろ問題を作って下さったんです．誰がかというと，中曽根総理がです．3つの例をあげます．

2.1 第二次教科書問題（「侵略」か「進出」か）

教科書問題とはご承知のように，日本の教科書が日中戦争を「侵略」といさぎよく認めていない，それはけしからん，というのが，主な話なんです．1回目の教科書問題は，鈴木善幸総理の頃で，片付いたような格好になっていたんですが，また第二次教科書問題が起きたんです．

これは中曽根内閣の時ある私的グループの人達の進言で今まで，「侵略」と書いてあったところを「進出」と書き換えようとしたんです．あれは侵略じゃない，中国大陸に進出したんだと．そのことを誰が中国にご注進，ご注進と持っていったのか知りませんが，大体わかっているんです．つまり日本国内でそういうことを言っても聞いてもらえない人が，日本は外圧に弱い国だというので中国に訴えます．すると中国の指導者は「それはけしからんなあ，君の言う通りだ」と言うと，その人は日本に帰ってきて，中国の指導者がけしからんと言っていると言って，政府与党に圧力をかける．そういう時代だったんです．その頃の野党の人は今与党になっておられる．どうしてそうなっているのか，皆さんがそうされたんです．

教科書に「侵略」とあった字を消して「進出」と書けば侵略でなくなるなんて，その単純な幼稚な発想そのものをあざ笑わなければいけないのに，誰もあざ笑わないのです．

そんな文字の問題じゃないんです．つまり事実がどうであったかということが，問題なのにそれをどう書くかによって性格を変えようなんて，これは大間違いです．

そのことは，現在の話に移し変えますと「不戦決議」とかが今，国会で議論になろうとしているようです．けれども，その中でも「謝罪」はいけないとか「反省」はどうだとか，言葉でごまかすというのか，そういうくだらんことにこだわつている今までの政治体制に対する不満が，今度の東京都知事や大阪府知事の選挙の結果に出ている，と私はそう思ってるんです．

極言をすればですね，高レベル廃棄物の処理施設が完成するのは，2040年代なんていう話がありますが，私は日本国が2040年まで持つかどうか非常に疑問だと思っています．

では，中国はどうだ．中国は，2049年というのが建国100年なんです．この2049年を目標に人口を15億に抑えて，1人当たりのGNPを400＄のレベルにするといって今，改革開放をすすめているんです．いろいろ言われながらも着々とそれに近づいています．中国の当面の目標は2049年なんです．わが国の当面の目標は何でしょう．この次の選挙とかそんなものしかないん

です．その先何にもないんです．その次何があるかというと2040年代に高レベル廃棄物の処理施設ができます．その間飛んでいるんです．そんなことで本当にこの国がいいのか私は今日それをあんまり言うつもりはないんですが，それが，この侵略か進出かという教科書問題のおかしさでもあるんです．

2.2 靖国神社公式参拝
(「軍国主義の犠牲者」と「東京裁判」)

靖国神社の公式参拝．これも3,000人が呼ばれた翌年の1985年です．85年の8月15日に中曽根内閣が初めて総理以下閣僚が「公式参拝」した．これが問題になったんです．誰が問題にしたかというと，最近不戦決議反対と言っているような人が，これを大いに支持し，そうでない人，つまり今与党になってる人達がけしからんと言って反対した．国論が2つに割れるような論争をやるわけです．そういうのをまた新聞が面白おかしく，書きまくる．参拝した大臣をつかまえては，あなたのは公式ですか，私的ですか，あなたは署名する時に肩書きは何と書きましたか．玉串料はどこから出ましたか，毎年毎年あんなバカな質問をくり返しやっている日本のジャーナリストというのはこれはもう国を滅ぼすものと私はいつも思うんです．

皆さんはどう思っておられるか知りませんが馬鹿げています．そんなことは，個人の問題なのです．私は当時大使をしてまして，中国からいろいろ言われた時に，胡耀邦総書記なんかによく言ったんです．これは個人の問題で政府がどうする，国がどうする，という問題じゃない．自分の国のために殉じた家族とか先輩とか同僚がいれば，その人の霊を弔うというのは人間としてあたり前のことでしょう．どこの国に行っても無名戦士の墓というのがあって，外国のお客さんも花束を捧げて敬意を表する．それは侵略戦争であろうとなかろうと，自分の国のために命を捨てた人に対して敬意を払うというのは，これは人間として当たり前のことなんです．だからそれにケチをつけられたら僕だって怒りますよ，と言ったんです．すると彼らが言うには，「それを言っているんじゃないんだ．“公式参拝”という名で，個人の問題を国家レベルの問題あるいは政府の問題にして，そして，公式参拝をする事によって，あの戦争で死んだ人達は，決して侵略のために無駄な生命を捨てたんじゃないということを言って，無駄な生命じゃなかった，侵略じゃなかった，ということにつながっていく．だから特にA級戦犯などが祭られている靖国神社に公式参拝する事によってA級戦犯の名誉を回復するようなことになるのであれば，中国としては決して見のがすわけにはいかない．」——これが彼らの論点です．

この時に私はつくづく思ったんですが，心から参拝したい人は参拝すればいいし，参拝したくてもしない人，あるいは靖国神社の方を見たくもない人，それは個人個人の自由だと思うんです．そういう人間個人の心の問題を，こういう制度の問題にして，そして戦争の評価につなげたというのは，全く愚かなことだというのがこの２番目の話です。

2.3 防衛費とGNP１％
(「誰が」「何を」「何から」)

3番目は，防衛費の1%枠．これも三木内閣の時に，どこまで防衛費をどんどん増やすんだと追求されて，GNPの1%枠位を目途にしよう，まぁ1%枠位ならと言って決まったんです．これまた今与党になっている人達が1%枠は絶対守らなくてはいけないと言って毎年計算して，0.998%よし，0.995%よし，とこう言っていたのが，この年になると1.004%になったんです．1%枠を突破した，けしからんと言うのです．皆さん面白いとお思いになりませんか．0.996%ならいいけれど1.004%ならだめだと，何が別れ道になるんでしょう．ただそれだけのことで国会で論争して，何週間もテレビでご覧になっているような質疑応答をやっているんです．問題はそうじゃないでしょう．国を守るためには何が必要か，今の日本のサイズ，この経済力，これを守るためにどれくらいの防衛力が必要かということはこれはパーセントの問題じゃないんです．10%ぐらい必要だというなら，必要なだけかければいいでしょう．0.05%で済むんなら0.05%でもいいんです．１％目標に一生懸命大蔵省の主計局が数字を計算するなんていうのは全く愚かなことだと思うんです．

ですから防衛費の問題の時にもですね，日本でなかなか埒があかないと野党の先生は中国へ飛んでいくわけです．そして中国の要人に会って，日本では１％という枠があったのに，——これは「枠」と言ったって単なる「目途」なんですよ，「目途」というのは1.004%はだめなんていう話じゃなかった筈なんです．——ところがもうその枠を突破している．これは日本が軍国主義に走る危険をはらんでいる．中国はどう思いますかと，こう聞くんです．そうすると中国は，いやそれはちょっと危ないなとこう言うにきまっています．お世辞に．そうすると，それを持って帰ってきて，中国じゃ１％枠突破は危険だ，日本軍国主義化の兆候だ

といって反対している．政府はどうする，とこう迫るんです．それを毎年やってきたんです．それが1％枠です．

それで防衛は「誰が」「何を」「何から」ということが問題です．これは我々が，日本国及び国民を，外からの侵略に対して守る，とこういうことでしょう．そうすると，わざわざ外に行って聞いてみる必要などないんです．自分で決めればいいんです．日本及び日本国民を守るために何億ドルがいるかなんていうのを，どうして韓国や中国に行ってこれではどうでしょうか，アメリカに行ってこれではどうでしょうかと聞いてまわり，みんながいいと言ったから，じゃうちの防衛費はこれだけにします…….

そんな馬鹿な防衛費の決め方をしている国は，世界中どこを捜したってないんです．わが日本だけなんです．聞いて回ったのは誰かというと，みんな野党なんです．今の与党です．そういう人達がどんなに日本の国を害したかということは，本当に考えなきゃいけないと私は当時北京で1人憤慨しておったんです．それが奇妙な日中関係です．

3．胡耀邦失脚と日本
――光華寮裁判と三権分立

胡耀邦という人は，中国共産党の総書記をしておりまして，日本に来て，日本の素晴らしい工業化の現状を見てびっくりして，日本に学ぶにしくはないというので，100％日中友好ということに信念をもって努力した政治家だったんです．思い切ったことをやって，日中関係というものを今の世代だけでなくて，次の若い世代にも理解してもらおうと3,000人の日本青年を呼んだのが1984年だったのです．

ところが1985年になると，今言いましたように，教科書問題が起きる．靖国神社の参拝の問題が起きる．GNP１％枠の問題が起きる．次から次へと中国人民の心を逆撫でするような出来事が起きるんです．これらはみんな，日本の当時の野党，今の与党の人達が向こうに行って勝手に火をつけているだけの話なんですが，中国の人達が非常に不審に思った訳です．胡耀邦総書記は日本のことを一生懸命言っているけれども，肝心の日本はどうですか．見てご覧なさい．次から次へと中国が困るようなことを起こしている．それでも，日中友好でいくのか，というのが胡耀邦批判の大きな理由の一つだったのです．せっかく日本のことを一生懸命考えてくれていた総書記を引きずりおろす様なことを誰がしたかというと，中曽根総理がしたと言えば言えることなんです．その中曽根総理は口を開けば中曽根－胡耀邦の信頼関係がある限り日中関係は揺るがないと，こう言っておられたのですが，結局一番大事なパートナーである胡耀邦総書記を引きずり下ろすことになったわけです．

これも奇妙な話だと思うんですが，その胡耀邦がいよいよ失脚するということになった時に，中国の外交部つまり日本で言えば外務省が，今までは一生懸命日本のために努力をし，また日本を弁護していた外交部が，どうもそういうラインに乗っていると危ない，胡耀邦失脚で外交部も幹部失脚ということになりかねないと心配して，中国の外交部も日本に対してはちゃんと是々非々で臨んで居るんだ，言うべきことはちゃんと言っているんだということを天下に示すために，「光華寮裁判」というのを引っ張り出してきた，と私は見ているんです．私がそういうことを言うにはそれだけの理由があるんです．今日は立ち入った話まではいたしませんが，中国の外交部の外交部長とか副部長とか日本担当の局長とかが，日本に甘いことばかり言ってる訳じゃない，光華寮裁判に対してもこういうふうに文句を言ってるんだと言って，その言った文句が日本の受け入れられないような妙なことを言ったんです．あの裁判は，日本の司法権が「中華民国」の国家としての存在を認める間違った裁判だと言うわけです．これは大阪高裁が差し戻して京都地裁に戻った当時のことで，今最高裁にかかっている案件です．日本の司法権は，日中共同声明とか日中平和友好条約に反するようなことは出来ない筈だ．それをやってるんだからこれを抑えるのは日本政府の責任だ．中曽根総理は大変有力な総理だと聞いているが，中曽根総理の権限であの判決を全部破棄して，正しい判決をするように何故指示しないんだと，こういう言い分なんです．

貴方はそんなことを言うけれど，日本は三権分立で，あの田中角栄のような実力のある総理でも有罪になるんだ．総理だからといって，裁判所を自分の言う通り動かすなんて，それは中国なら出来るかもしれないけれど，日本では出来ないんだと言うんですが，日本の裁判が共同声明に反しているのだから，これを何とかするのは日本政府の責任だというんです．この時ばかりは私は，条約局の法規課長などやった経験もありまして，法律のことなら負けちゃいないという訳で，三権分立と，司法権と行政権の関係，それから光華寮裁判そのものが中華民国を国として認めるなどと言う，

そういう裁判じゃないこと－．戦前戦中の中国人留学生の中の一部親中派の人達が寮の規則を守らず寮から立ち退かないので，それら寮生に寮から立ち退けという立ち退き請求の民事裁判なのです．国家の総書記と総理大臣，あるいは大使まで出かけて問題にするような裁判かというと，そうじゃないんです．だけど中国という国はご承知のように，一度言うと面子があって，簡単には引き下がらない．私は私で，三権分立は日本の憲法の根本になってるんで，これを崩す訳にいかない．司法権は独立で，行政権は介入できないということを言ったんです．

そうしましたらさすがに中国もだんだん日本の言ってることにも多少の理はあるのかなと思ったのか，ある段階から言わなくなったんです．

ところがこれにはまだ先があるのです．中国の方は言わなくなったのに日本の方からまた言い出す人がいたんですね．本当に情けない国だと思うんです．せっかく中国がこれは当分静かにしておこうと思っているのに，日本から行った人が「大体あの裁判は，最初の京都地裁の判決の時からおかしいと思ってたんだ．中国の言う通りだ．」なんて言うんですよ．そんなこと言うんだったら，中国に行って言う前になぜ日本でそういう裁判批判の運動をしなかったのか，それまでは一言も言わない人がですね，中国が言ったと言うと，俺は最初からおかしいと思っていた，などと言う．そういう人たくさんいますよ，日本には，この辺までが私が在勤中で体験したことで，ご参考になりましたかどうか．なるほど日本と中国というのは面白い関係だな，とお思いになればいいんですが．

あと4，5，6は私が退官してから引き続き中国を見ていて相変わらずだなぁと思ったことです．

4．第二次天安門事件（1989.6.4）と「人権」

最初は何かと言うと，第二次天安門事件と人権の問題です．私は90年に「残された社会主義大国・中国の行方」（KKベストセラーズ刊）という本を出したのですが，この本を書いたのは，ちょうど天安門事件の直後だったんです．そのころ日本ではアメリカやフランスと同じように，人権無視でけしからん，制裁をしなければいかん，中華人民共和国は崩壊する，共産党一党独裁の世の中は終わった，鄧小平はもう亡くなった，死んだに等しい，というようなコメントが多かったのです．その時にそれは間違っている，あの事件はそんな人権問題だと大騒ぎする問題じゃないんだということを，私が最初の書き出しのところから書いたのがこの本なんです．面白いとお思いになったら，どうぞお買いになって下さい．

そこで人権問題ですが，あの天安門事件のあとで日本から行ったある政治家が，中国の首脳と会ってそのことが日本の新聞に出ました．小さく，小さくなんですよ．実際の話の内容はどうだったかというと，鄧小平が言うには，「皆さん人権，人権といわれるのはよくわかる．だけど自分達だって人権は尊重する方がいいというのはわかっている．しかし，国には「人権」の他に「国権」というのがあるんだ――国権一国の権利です――．政府としては人権も守らないといけないが，国権も守らなきゃいけない．国権が守られていない様な国では人権を尊重しようにも尊重できないではないか．では「国権」とは何かというと，国の主権である．国の独立である．国の尊厳である．」これは彼の言い分です．主権と独立と尊厳，これが国権だ．これを守るためにはある程度人権が制約されてもやむを得ないという考え方です．これは，日本の憲法の中にもあります．我々だって，随分基本的人権を制約された中で，はじめて秩序ある生活をしているわけです．当たり前のことなんです．

ところが，そういうことを全部忘れて，あの中国のように広大な，12億もいるところに日本やアメリカやヨーロッパと同じような人権尊重の社会を今すぐ作れって，そんなことは出来っこ無いということを知ってか知らでか，偉そうに人権屋さんが，人権，人権と言うんです．そういう方が大いに人権尊重を叫ばれるのを私は反対はしませんけれども，相手を見てしなければならないと私は思うのです．

中国は，あの天安門事件で解放軍を投入して，秩序を回復し，そして改革，開放を続けて，そして今の中国をご覧なさい．発展が早すぎるといって叱られるぐらいに発展しているんです．経済制裁をするといっていたアメリカやヨーロッパはどうしていますか．いつの間にやら元のもくあみです．中国は制裁されようが，何されようが，断固我が道を行くんです．そうすると，周りがみんな疲れ果てて，結局制裁もうやむやになって，最恵国待遇もやりましょう．それから，今度の知的所有権保護の問題でも妥協しましょうと，アメリカの方が中国に歩み寄って，元に戻っちゃうんです．中国の方は1人か2人，ちょっと釈放したり，何かするともうそれで人権の問題で中国にも進歩が見られたなんて言いますが，そんなものは大したことないんです

よ，本当は．

そういうことがありまして，この人権の問題についても日本は戦後50年，冷戦構造の中でアメリカの庇護を受けて，欧米志向の経済発展をして，そして経済大国と言われたことに多少いい気になって，世の中は欧米的な価値観が優れているというように誤解をしている向きがあると思うんです．そういう志向で開発途上の国を見てものをいうから，日本は開発途上の国から愛されないんです．

5．賠償放棄と戦争責任

これは日本の戦争に対する認識というか，けじめというのが，いかにもお粗末だということです．心ある人はおわかりになっているんだろうと思うんですけれども，全くわからない人が政治家の中にいたり，声の大きい人にそういう人が多くて，それで日本の中にはまだ再軍備論者がいるんじゃないかと言われるようなことになったりしています．そういう人は，俺達はアジアの被抑圧民族を解放するためにあの戦争をやったんだ，何も侵略しようと思ってやった訳じゃない，自衛のためにやったんだ，それを何で反省する必要があるんだと言う立場でしょう．一種の確信犯なんです．ですからそれを一生懸命説得しようと思ったって，確信犯はどうしようもないんです．どうしようもない確信犯だけを見て，日本全てがそうだと言われて，日本の国益というか，国の評価が歪められてる．これによって日本が被る損害というものはものは決して少なくないと思うんです．

5.1 中国人民抗日戦争紀念館

そこで第一は中国人民抗日戦争紀念館．北京からいい道が出来てますから，40分ぐらい車に乗ると蘆溝橋のたもとに到着します．蘆溝橋事件というのは，ご承知のように，それまで支那事変，上海事変と言われていたのが日中戦争に拡大するきっかけになった事件ですが，この蘆溝橋のたもとにある抗日戦争紀念館に行きますと，体育館みたいなのが２つありまして，その中に日中戦争時代の日本軍国主義の被害を受けた証拠物品だとか，写真だとか，いろいろなものが陳列されています．私が行ったのは，土曜日の午前だったのですが，その時でも小学生，中学生が先生に連れられて大勢来ている．その子供達が陳列台にある日本軍の捨てて行った鉄カブトだとか，飯盒，はいのう，それから38式歩兵銃なんていうのがあったんです．それに写真も沢山あって，中国の善良なる市民が，日本軍に凌辱されているところだとか，首を切られている写真だとかが一杯あるんです．そんなものを小中学生に見せて，これで一体中国は子々孫々の日中友好をどう考えているんだろうか．片一方で青年を3,000人も呼んで日中友好のために努力しているかと思えば，片一方ではそういうものを幼い学生に見せている．そう思いながら最後に行きましたら，出口の所に大きな写真のパネルがあって，それが1972年９月29日の日中共同声明が出された時の周恩来と毛沢東と姫鵬飛（外相），我が方は田中角栄，大平正芳，二階堂進そういう方が日中共同声明を出して，子々孫々の友好を約束したときの写真です．そして，中国人民は日本軍国主義によって踏みにじられたけれども，これからは日中友好のために努力するという約束ができたことを訴えて，更にその横にもう一つパネルがあって，そこには日本国憲法第９条だけが特記してあるんです．日本はこういうふうに，もう戦争はしない国になったのだ．ということを教えているんです．そればかりじゃないのです．その上に字が書いてあって，「前事不忘　後事之師」――済んだことを忘れないで，将来の戒めにする――日本では済んだことは忘れて，将来の戒めにしない．そういう風に感じるのですが，中国では済んだことは忘れないで，これを将来の戒めにする．このように戦争の評価，戦争のけじめについての双方の考え方がうんと違うということを，そこで私は感じたんです．それがこの紀念館の話です．

5.2　「黒塗りの公用車」と「日の丸」

これはちょっと気恥ずかしい話なのです．今，中国本土どこでも黒塗りの公用車に日の丸の小旗を掲げて走ることのできるのは日本大使だけなんです．私が大使でいる頃は，私の車だけがそうだったんです．ですから私が走っていくと，日本の大使だなと中国の人は思ってくれて，この大使は済んだことを忘れないで将来の友好のために努力してくれている大使だ，いろいろ経済協力も技術移転もしてくれてありがたい大使だと思っていただきたい，と思いながら走っていたんですね．ところが，ある人が北京市の幹部の人と一緒に天安門広場を歩いていたら，たまたま黒塗りの公用車が日の丸をつけて走っていたんだそうです，それでその人は大使が走っているなと思ったら，一緒にいた北京市の幹部が，「率直な気持ちを言うけれども，私はあの黒塗りの車が日の丸の小旗を立てて走っているのを見ると，今でも胸がムカムカするんです．」と言ったと言うんです．それでその日本人はびっくりして私

に話してくれました．私もショックを受けて，みんなが暖かい眼で見てくれているなどと思ったら大間違いだ．みんな胸がムカムカとしながら私の車を睨みつけてるんだなと，こういうふうに反省したんです．それがこの話なんです．

5.3 「黒い雨」と「日の出」

「黒い雨と日の出」というのは，私の最後のバレエの台本と関係があるのです．

「蕩々たる一衣帯水」というバレエで，一衣帯水の間柄にある日中両国が，何千年もあるいは何万年も昔から隣同士ですから，お互いに知り合って，それから長い歴史をいろいろ紆余曲折を経て，最後の100年は不愉快な戦争をやって，それがやっと終わって，これからは仲良くしていくんだという，その長い歴史を40分位のバレエにまとめてあるんです．その大きな流れの中で日本が無謀な戦争をやって，その終わる直前に「黒い雨」が降った，それが一つのきっかけになって，戦争が終わったという場面を書いたんです．中国は，この「黒い雨」は困ります，と言うんです．このバレエは日中合作で，作曲もそれから振り付けもダンサーも日中両方でやろうというバレエだったものですから，中国が納得しないと踊ってもらえないんです．

「黒い雨」は困ります．何故だと聞いたら，（これを引き出すまでには随分苦労したんですが．）要するに，中国では，「黒い雨」つまり原子爆弾についての評価がまだ決まってないんだ．だから，こういうものが出ると中国人民がいろいろ悩みます．迷います．それは困るんですと言うのです．

もう一つは，「日の出」．

私は「黒い雨」はやめて，別の形にして，一番最後にこの一衣帯水の日本と中国を結んでいる海から，平和な海から，朝日が，日の出が上がって，そして輝かしい日中両国民あるいはアジアの希望を象徴するというようにしたんです．

そうしたら今度はこの「日の出」が困ります．何故困るんだ．日の出を見ると軍艦旗を思い出しますというのです．軍艦旗を思い出すなんていうのは，思いがけなかったことです．

つまり中国の人達の心の中には，そういうものが潜在的にまだ残っていて，そして表向きは日中友好と言っているのだということを知ってもらうために，こんな話をいたしました．

6．台湾のこと

これは大変なことなんです．台湾とか韓国というのは，これから原子力発電がどんどん進んで，この安全な原子力エネルギーを活用しなければいけないし，やがてはその廃棄物をどうするかという問題も起きるわけですが，それは遠い数十年先のことでしょう．しかし，「台湾」は，今の問題としても大変なんです。

1945年に戦争が終わったんです．その頃，台湾は日本のものだったんです．そしてポツダム宣言を受託して，日本は台湾を放棄した．そして，1949年に，中華人民共和国が誕生したんです．その後，日本は1952年に台湾にある「中華民国」と平和条約を結んだんです．この辺から問題が起きるんです．中華人民共和国があるのに，なぜ台湾と平和条約を結んだか．それは一口で言えばダレスがいたからでしょう．つまり，アメリカの極東戦略のもとでは，日本は，韓国，台湾と一緒に反共の陣営に入らなきゃいけないわけで，共産主義の中華人民共和国を承認するなんてとんでもない話で，それで，1952年に台湾の「中華民国」と平和条約を結んだわけです．

それから20年たって，やっと日中共同声明で先程申し上げた様に，日中間の国交が正常化されて「台湾」との関係を切ったんです．それまで「台湾」は何にも悪いことはしてない．国連の中でも実に品行方正で，分担金もちゃんと納めてるし，日本との関係も実に良くいっていた．だのに，日本は1972年に日中正常化をして，「台湾」を切った．というんですけれども，本当はそうじゃないんです．日本が中華人民共和国との関係を正常化すると，「台湾」の方は切れるんです．切ったんじゃなくて自ずから切れるんです．逆に言えば「台湾」と関係持っている間は，中華人民共和国とは関係を持てなかった．何故かというと，両方とも「中国は一つだ」というから，両方やると2つになる．どっちかを認めれば，どっちかはゼロ．これは当たり前のことで，皆さんのように科学的な頭の方がお考えになれば，すぐおわかりになることです．ですからこれはやむをえないんです．それをけしからんと言っていたのは，日本の中の一部の人達なんです．

それから今度は6年経って，1978年に日中平和友好条約が結ばれたんです．この頃私はアジア局長をしておりまして，この仕事をして面白い話がたくさんあるんですが，そのことは「らしくない大使の話」（読売新聞社刊）という2冊目の本にいろいろ書いてありま

す．その後，日本は中国との間は公の関係，「台湾」との関係は事実上の関係ということでうまくやってきているんです．台湾問題は，アメリカよりも日本の方が上手に処理しておるんです．ところが，そのうちにだんだん日が経って，当たり前ですが，日が経つと年を取るんです．中国でも年を取る．日本でも年を取る．これは万国共通なんです．それで，「中華民国」という国の，存在がだんだん薄れていくんです．後に何が残るかというと，“台湾人の台湾”というのが残るんです．で，今の李登輝総統というのも，元は中国大陸から渡ってきた漢民族ですけれども，蒋介石よりもずっと前に福建省あたりから渡って来た漢民族の系統なんです．ですから今や台湾では，“台湾人の台湾”というのがまとまってきた．民族自決―― self determination というのは，国連憲章の一つの大きな基本原則ですが，その原則に従って，台湾人の台湾を認めろ，ということになります．

それが中国にとっては，大変に厄介なんです．せっかく中華人民共和国の不可分の領土の一部であるといってきた台湾が，独立するようなことになって世界の人達もそれがもっともだと言いだしたら，中国の面子がない．そこで中国は，それを認めるわけにはいかんというので，あのアジア大会でも，政治が介入してはいけない筈のスポーツ大会でも――，台湾から徐立徳という人が来たら，それはけしからんという．今秋，大阪開催のAPECでも，台湾から人を呼ぶ時は，こういうのを呼ぶとけしからんと，何でも難癖をつけるんです．日本は中国から言われると，一部の人は、あー困った困った何とかしなきゃと思うでしょ．これは日本人の人のいいところですね．そんなことは貴方に言われる筋合いは無い．台湾は自分のものだというなら早く自分のものにして下さればいいんです．自分のものにしないで，人のところへ来ては，あれは俺のものだと言う，それは迷惑な話だという気持ちがあっていいのに，マスコミも何もみんなだらしなくて，そういうことを言わないのが現状です．

7．鄧小平のこと

鄧小平のことは、冒頭に申し上げました．中国にとっては鄧小平のことはもはや日本で騒いでいるような問題ではない．問題は21世紀の半ば建国100年に当面の目標を達成するために，経済改革，開放をやっているということです．1968年来やっているわけです．その流れの中に鄧小平の生命，生死がどれだけの重みを持っているか．そもそも2049年まで現役でいる人なんてありっこないんですから．日本だってそうでしょう．私なんか，絶対いませんから．2049年は，皆さんの中で，若い元気な方はまだおられるかもしれませんが．そういうことは全部呑み込み済みです．中国という国は，中国の国として，民族として，21世紀の半ばに向かって歩いているんです．その中で，毛沢東が死んだ，周恩来が死んだ，この間，陳雲が死んだ，鄧小平が死ぬかも知れない，誰々が死ぬだろう，といってそれでいちいち中国がひっくり返っていたら，大変なことです．そんなことでひっくり返って欲しいと言わんばかりの「日本で見た中国」というものに，皆さんがあまり惑わされないようにしていただきたいというのが，私の今日のお話の主旨だったんです．

ご静聴ありがとうございました．